国　語

注　意

1　問題は 1 から 5 まで で、15ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
2　検査時間は**五〇分**で、終わりは**午前九時五〇分**です。
3　声を出して読んではいけません。
4　答えは全て解答用紙に**ＨＢ又はＢの鉛筆（シャープペンシルも可）**を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい**。
5　答えは**特別の指示**のあるもののほかは、各問の**ア・イ・ウ・エ**のうちから、最も適切なものをそれぞれ**一つずつ**選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や。や「なども**それぞれ**一字と数えなさい**。
6　答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄から**はみ出さないように書きなさい**。
7　答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
8　**受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、**その数字の◯の中を正確に塗りつぶしなさい**。
9　解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 知らぬ間に寄る年波。

(2) 魔女をまねてほうきの柄にまたがる。

(3) 摯実な性格。

(4) 日の光を遮蔽する。

(5) 下学上達が達人への近道。

2 次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) オカモちで料理を運ぶ。

(2) シンゼンビの調和した理念。

(3) 「トウカ親しむ候。」という季節の挨拶。

(4) 観客のカンキョウがひきつけられる名作。

(5) ガンコウシハイに徹す。

---

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

母親の成美（なるみ）が、仕事で家を留守にするため、小学２年生の玲（れい）は、はじめて一人で祖父母、曽祖父のいる母の実家を訪れる。

夕ごはんは、すき焼きだった。

昼と同じでおじいちゃんとおばあちゃんが隣どうしに座り、向かいにぼくとひいおじいちゃんが並んだ。テーブルの真ん中に置いたカセットコンロの上に、黒く光る鉄鍋がでんとのっている。

「いただきます。」

四人で手を合わせ、まずは取り皿に卵を割り入れた。めいめい自分の分をかきまぜていると、「そうだ、父さん。」とおじいちゃんが言った。

「今日も電話に出なかっただろ。散歩のとき。」

卵が足りなくなりそうだったから、買ってくるように頼みたかったらしい。何度かけてもつながらず、結局おじいちゃんが買いに走ったそうだ。

「スマホ、また家に置いてったの？　それとも、気づかなかっただけ？」

「ああ、うん。」

「置いてったんだね？」

おじいちゃんが口をとがらせる。鍋に牛肉を入れながら、おばあちゃんも口を挟んだ。

「お出かけのときには、なるべく持ち歩いて下さいね。いざってときに連絡がつかないと困りますから。」

「ああ、うん。」

卵を念入りにかきまぜる手を休めずに、ひいおじいちゃんは答えた。明らかに気持ちがこもっていない。聞いてないな、とおじいちゃんが不服そうにぼやき、

「玲も一緒に行ったんだって？　雨の中、ごくろうさん。」
と、ぼくに話を振った。
「あれが父さんにとっちゃ、絶好のお出かけ日和なんだよ。あんまり晴れてるとつまんないらしい。変わってるだろ。」
(1)ぼくとひいおじいちゃんをかわりばんこに見て、にやっと笑う。
「な、父さん。雲が多いほどいいんだよな？」
「多けりゃいいってもんでもない。」
ひいおじいちゃんがめんどくさそうに答えた。
「はあ、そりゃ奥が深いね。」
おじいちゃんが首をすくめ、正面に向き直った。ひとまずひきさがることにしたようだ。じゅうじゅうとにぎやかな音を立てている鍋から肉をひときれつまんで、目の前にかざす。
「そろそろ、いいんじゃないか。」
「いけそうね。」
おばあちゃんも鍋をのぞきこんだ。ひいおじいちゃんとぼくの取り皿に、香ばしく色づいた肉を一枚ずつ放りこむ。
「ちょっとおなかを空けておいてね、お赤飯もあるの。今日は立春だから。」
「玲、立春って知ってるか？」
おじいちゃんが言った。
「うん。一年のはじまりだよね？」
「お、よく知ってるな。若いのに。」
「お母さんが教えてくれたから。」
(2)おばあちゃんとおじいちゃんが、ちらっと目を見かわした。
「うちでは毎年お祝いしてるのよ。昔から、すき焼きとお赤飯を食べる決まりでね。」
「うちは、焼肉を食べに行くよ。」

ぼくは甘辛い肉をかじった。やわらかくて、おいしい。
「立春に？」
「うん、当日じゃないけど。二月のはじめのほうの、土曜か日曜に。」
近所の焼肉屋さんで、満腹になるまで食べまくる。叔父さんが一緒の年も、ふたりだけの年もある。どっちにしてもお母さんはじゃんじゃん注文する。食べきれないんじゃないかとぼくが言っても、聞き入れない。日頃は慎重なわりに、ときたま強気になるのだ。お店を出るときには、立ちあがるのがしんどいくらいにおなかが重たくなっている。
お祝いなんだからぱあっといかなきゃ、というのがお母さんの言い分で、それでぼくも立春の由来を知ったのだった。
「そう……焼肉……。」
おばあちゃんが目をふせた。
ぼくはひやりとした。もしかして、よけいなことを言っただろうか。長年守ってきたルールを勝手に変えられて、気を悪くしたかもしれない。
「あの、ごめんなさい。ほんとはすき焼きを食べるんだって、ぼく知らなくて。」
言ってしまってから、まずい、とまたもやあせる。これじゃ理由になってない。ぼくが知らなくたって、お母さんはちゃんと知っていたはずだ。
顔がひりひり熱い。どうしたらいいのかわからなくなって、取り皿の底に沈んだ肉のかけらをお箸でつつく。うちにはすき焼き鍋もない、というのは言い訳になるだろうかと考えていたら、
「いいでしょう、どっちでも。」
と、ひいおじいちゃんがぼそりと言った。
「どっちも、肉だ。」
「だな。」
おじいちゃんがぷっとふきだした。
「大事なのは、祝おうっていう気持ちだもんな？」

テーブルの上でおばあちゃんの手に自分の手を重ねたのが、ぼくからも見えた。うつむいていたおばあちゃんが顔を上げ、ぼくににっこり笑いかけた。

「成美も……お母さんも、忘れないでお祝いしてくれてたのね。」

「そもそもうちだって、全部が全部、昔のままってわけでもないしな。」

おじいちゃんが言う。以前は、子どもたちにプレゼントをあげるという習慣もあったそうだ。うらやましい。

「年寄りだけじゃ、どうもなあ。クリスマスなんかも、子どもらが小さい頃は気合(きあい)が入ったもんだけど。」

「ね。だけど今年は、玲くんになにか用意しておけばよかった。」

「ああ、そうだな。ごめんな、気が回らなくて。」

「いいよ。」

ぼくはあわてて首を横に振った。

「ひいおじいちゃんに、メモ帳を買ってもらったし。」

「へえ、父さんが？」

ひいおじいちゃんはもぐもぐと口を動かしつつ、浅くうなずいた。口の中に食べものが入っているせいで返事ができないのかと思ったら、また次の肉をほおばっている。特に説明する気はないようだ。

「あと、長靴も。」

さっき家に帰ってきて、玄関で長靴を脱いでいるときに、「よかったら、これからも使って下さい。」とひいおじいちゃんが言ってくれたのだった。

「持って帰ってもいいし、とりあえずここに置いておいてもいいし。」

少し考えて、ぼくは答えた。

「(3)じゃあ、置いときます。」

うちにはぴったりのサイズの長靴が一足ある。それに、ここに置いておけば、次に来たときもまたこれをはいてひいおじいちゃんと散歩ができるだろう。左右をそろえ、ひいおじいちゃんをまねて、靴箱の手前に置いてみた。大きな深緑と、小さめの青。並んだ二足は、サイズのせいか親子っぽく見えた。

「長靴？　玲に？」

おじいちゃんが首をかしげたとき、どこかで聞き慣れない電子音が響き出した。

「あら、電話。」

おばあちゃんが立ちあがった。壁際(かべぎわ)の棚に置かれた電話機のボタンが、ちかちか点滅していた。

電話をとったおばあちゃんは、こっちを振り向いた。

「玲くん、お母さんよ。」

ぼくが受話機を耳にあてるなり、「玲、大丈夫？」とお母さんはせかせかと言った。

「大丈夫だよ。」

「そう、よかった。」

ふうっと息を吐く音が、耳もとに吹きかけられた。

「電話、どうして出ないの。何度もかけたのに。」

「あ。」

リュックに入れたまま、部屋に置きっぱなしだ。

「ごめん、忘れてた。」

「まあ、そんなことだろうと思ったけど。どう、そっちは？　順調？」

「うん。順調。」

昼間と同じ返事が、昼間よりも自然に、口から出た。すぐそばに立っているおばあちゃんと目が合った。

「おばあちゃんにかわるね。」

お母さんがなにか言う前に、ぼくは急いで受話器を引き渡した。

「もしもし？」

おばあちゃんは両手で受話器をぎゅっと握りしめている。
「うん、いい子にしてる……ううん、とんでもない……。」
おじいちゃんも席を立って、ぼくたちのほうにいそいそと寄ってきた。片手でおばあちゃんのひじをつつき、もう片方の手で自分の胸を指さしている。
「ちょうどすき焼きを食べてたところ……そうそう、立春だから。」
ぼくは食卓に戻った。
ひとり残ったひいおじいちゃんが、おかわりをよそっている。豆腐やねぎはよけて、牛肉だけを器用につまみあげていく。迷いのない手つきを見ていたら、ぼくも急に食欲がわいてきた。よく考えたら、まだそんなに食べてない。
お箸をとり直したぼくに、ひいおじいちゃんが突然言った。
「今度、あなたのお母さんも連れていらっしゃい。」
「ぼくが?」
聞き返したのは、逆じゃないかと思ったからだ。ぼくが、お母さんを連れてくる? お母さんが、ぼくを連れてくるんじゃなくて?
「はい。あなたが。」
ひいおじいちゃんはまじめな顔で即答した。ぼくもつられて、まじめに応えた。
「わかりました。連れてきます。」
「よろしく頼みます。」
後で、メモ帳に書いておこう。(4)お母さんに話したいことがいっぱいあるから、うっかり忘れてしまわないように。
おばあちゃんがほがらかな笑い声を上げた。おじいちゃんは受話器の反対側に耳をくっつけて、会話を聞きとろうとしている。ぼくはお尻を浮かせ、鍋をのぞいた。あたたかい湯気があたって、おでことほっぺたがじんわりと汗ばんだ。
ふと、ひいおじいちゃんが立ちあがった。窓辺に近づき、真っ白く曇ったガラス戸をゆっくりと開け放つ。
涼しい風がさあっと吹きこんできた。すっきりと澄んだ冷たい空気を、ぼくは胸いっぱいに吸いこんだ。雨はもう上がったようだ。ひいおじいちゃんの頭上に広がる夜空に、細い月が静かに光っている。

（瀧羽麻子「博士の長靴」による）

〔問1〕 (1)ぼくとひいおじいちゃんをかわりばんこに見て、にやっと笑う。とあるが、この時のおじいちゃんの気持ちの説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 雨の日の散歩のエピソードから自分の父親の曇り好きの話を滑稽な様子で語りかけ、孫の玲との会話の糸口にしようとする気持ち。

イ 自分の父親の独特な感性の話をして、父親と孫の玲の反応を楽しみながら食卓の雰囲気をなごやかなものにしようとする気持ち。

ウ そっけない返事をする自分の父親との会話では楽しい会話にならないので、孫の玲にも会話に参加してもらおうとする気持ち。

エ 普段は気難しい様子で今ひとつ何を考えているかわからない自分の父親が、孫の玲と一緒に散歩に出かけたことをうれしく思う気持ち。

〔問2〕 (2)おばあちゃんとおじいちゃんが、ちらっと目を見かわした。とあるが、なぜか。理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「お母さんが教えてくれた」という孫の言葉に、伝統的な立春の正しい過ごし方を正確に伝えるべきだ、と互いに意識したから。

イ 娘と一緒に暮らしていた時にも立春を一緒にお祝いしてきたということを、孫にも伝えるいい機会にしよう、と互いに決意したから。

ウ 立春が一年のはじまりであるということを孫が理解していると知り、よく教え込んでいる教育熱心な娘だ、と互いに感心したから。

エ 立春という日が特別な日であるということが、娘から孫にも伝わっているのかもしれないと、夫婦が互いに感じ取ったから。

〔問3〕 (3)じゃあ、置いときます。と答えたときの玲の様子を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア うちにある自分にぴったりサイズの長靴よりも、ひいおじいちゃんがくれようとしている長靴の方が自分に似合っている気がして、とても満足している。

イ ひいおじいちゃんともっと一緒に散歩がしたいと考えているので、この家に遊びに来る口実にするために、長靴をこの家で保管してほしいと思っている。

ウ 長靴がこの場所にあることで、この家の一員であるような気になり、何よりもひいおじいちゃんとの特別なきずなを感じられるような気になっている。

エ 靴箱の手前に並んで置いてある大小二足の長靴は、ぴったり寄り添って並べて置いてあり、まるで親子みたいに見え本当の家族になれたように感じている。

〔問4〕 (4)お母さんに話したいことがいっぱいあるから、うっかり忘れてしまわないように。とあるが、ここから分かる玲の考えの説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア メモに書いて残しておかないといけないと思うくらい、おじいちゃんやおばあちゃん、ひいおじいちゃんとの経験は自分の大切なものである、ということをお母さんに伝えたいという考え。

イ ひいおじいちゃんとの自分の思い出を、メモに残してお母さんにきちんと伝えることで、お母さん自身が経験した家族との出来事を思い出してもらいたいという考え。

ウ お母さんの実家で経験したことを、ひいおじいちゃんに買ってもらったメモ帳に書いて残しておくことで、ひいおじいちゃんとの思い出までをも自分の宝物にしたいという考え。

エ 自分がおじいちゃんやおばあちゃん、ひいおじいちゃんと過ごしたことを大切に思い、それを書きとめておくことで、ここでの出来事をお母さんと共有したいという考え。

〔問5〕 登場人物の描かれ方の説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア ひいおじいちゃんは、自分の息子との会話のそっけなく面倒くさそうな様子から、周りとの関係性に関心がないように見えるが、ひ孫との会話からは家族とのつながりを意識しているように見える。

イ おじいちゃんは、妻や独立した娘を常に気遣い、いつでも二人を支えているという自負を持ちながらも父や孫との関わり方には苦手意識を感じ、二人を振り向かせようと必死になっている。

ウ おばあちゃんは、初めて遊びに来る孫に喜んでもらいたいと思い、精一杯のもてなしをしようと、まるでお祝いをしているかのような雰囲気を演出しようとしているが、戸惑いは隠せないでいる。

エ お母さんは、大人ばかりの場所に子ども一人で行かせたことへの罪悪感や、両親に子守りの負担をかけてしまったことへの申し訳なさを感じてはいるが、電話での会話では強気をよそおっている。

〔問6〕 次は、この本文に用いられている＝＝＝線部をつけた表現の特徴についての授業の様子である。あとの問にそれぞれ答えよ。

A みなさんは、「畳語」という言葉を聞いたことがありますか？

B 「畳語」ですか？ 聞いたことないです。

A 初めて聞いた人もいるかもしれないですね。この文章には「畳語」が多く使われています。「畳語」とは、「物を折り返して重ねる」という意味の「畳む」という言葉が元となって作られた言葉で、同じ語の繰り返しで構成されているという特徴があります。では本文から、「畳語」を探してみましょう。

B はい。そうですねぇ…「じゅうじゅうとにぎやかな音を立てている」の「じゅうじゅう」はどうですか？

A いいですね。この「じゅうじゅう」という畳語は、肉の焼けている様子をよりイメージしやすくする効果がありますね。

C なるほど。ただ同じ語を繰り返しているだけではなく、「畳語」にはその表現のもたらす効果があるということですね。

A その通りです。では、「じゅうじゅう」以外に、「物の様子や状態をイメージしやすいように印象付ける効果」をもつ畳語は見つけられますか？

D 「○●○●」がそうですかね。

A いいですね。では、「その時の気分や感情を表す効果」を持つ畳語は探せますか？

B 「□●□●」や「△▲△▲」などはどうでしょうか。

A なかなかいいですね。さらに、「時間が徐々に迫る様子」を表現しているというのもありますね。わかりますか？

C 「▲◇▲◇」ですか？

A そうですね。正解です。

B 先生。おもしろい畳語を見つけました。この「顔がひりひり熱い」の

「ひりひり」というのは、本来は皮膚の状態を表しますが、ここでは玲の「 1 」や「 2 」、「 3 」などの心理的な状態を表す効果があるように思います。

A 鋭いですね。文脈によっては、複数の効果を持つ畳語もありますね。確かにおもしろいですね。

i 会話文中の「○」「●」「□」「△」「▲」「◇」の記号は、それぞれ異なるひらがな一文字分を示し、同じ記号には共通したひらがなが入る。「□●□●」と「▲◇▲◇」の表す言葉を、本文中からそれぞれ抜き出し、「□」「●」「▲」「◇」に入るひらがなをそれぞれ答えよ。

ii 空欄「 1 」「 2 」「 3 」に入ることばの組み合わせとして最も適切なのはどれか、あとの選択肢**ア**～**オ**から選べ。

ア 高揚　不安　反省
イ 緊張　動揺　焦燥
ウ 動転　心配　葛藤
エ 悔恨　当惑　落胆
オ 困惑　驚嘆　興奮

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔**注**〕がある。）

日常の言語活動における論理は、話の筋道といったごくインフォーマル*なものである。どんな場合でも、言葉に筋道が通っていなければ、伝達は成立しようがない。「筋」とか「筋道」とかいう語が示しているように言語に内在する論理性は何か「線」のようなものと感じられているのが普通である。

表現の受け手はこの言葉の筋道をたどりながら理解を進めて行くわけだが、送り手との間の心理的関係の親疎によって筋道の性格も変ってくる。送り手と受け手が未知の人間であるような場合、筋道はしっかりした線状をなしていて、受け手がそれから脱落しないようになっていなくてはならない。論理は密でなくてはならないのである。その典型的な例は法律の表現で、ここでは受け手がときとしてはまったく対立する観点に立っていることがある。したがって、表現の道筋はあくまで太くしっかりしたものである必要がある。かりにもその筋を外した解釈が可能であっては不都合がおこるからである。多くの人々が法律の条文をうるさいものと感じるのは偶然ではない。送り手が受け手を信頼していないのである。法律でなくても、受け手の連帯感が保証されていないとき、表現は念には念を入れて、誤解のおこらないように配慮されたものになる。緊密な論理はその結果にすぎない。

これと反対に、受け手がごく身近かに感じられているときの表現はわかりきったことをくどくどと説明する必要がない。要点だけをかいつまんでのべるだけで誤解も生じない。言語の冗語性*も小さくてすむのである。一般にお互いが熟知しているような集団の内部においては形式的論理はむしろ敬遠される。その代表的な例は家族同士の会話である。(1)第三者が聞けば何のことかまるでわからぬような省略の多い飛躍した言い

方をしているが、それでけっこう話は通じ合っている。形式論理から見れば没論理と言えるかもしれないが、まったく論理を欠いているというわけでもないであろう。むしろ別種の論理が作用していると見るべきである。

相互によく理解し合っている人間同士の伝達においては言葉の筋道はつねに完全な線状である必要はないことが多い。要点は注目されるが、それ以外の部分はどうでもよい。＊等閑（とうかん）に付（ふ）されたところはやがて風化がおこるであろう。こうして、方々が風化して線に欠落ができると、線的な筋が点の列になって行く。親しいと感じ合っている人たちの間の言語における論理は線ではなくて点の並んだようなものになっている。

人間には、こういう点をつなげて線として感じとる能力がだれにもそなわっているのである。したがって、点的論理が了解されるところでは線的論理の窮屈さは野暮なものとして嫌われるようになる。なるべく省略の多い、言いかえると、(2)解釈の余地の大きい表現が含蓄のあるおもしろい言葉として喜ばれる。点を線にするのは一種の言語的創造をともなうからであろう。点の線化は昔の人が星の点を結び合わせて図形を読みとり、名を冠して星座をつくりあげたことなどにもあらわれている。

日本語はヨーロッパの言語が陸続きの外国をもった国で発達したのとちがって、島国の言語である。同一言語を同一民族が長い期間にわたって使っていれば、相互の了解度はきわめて高くなる。家族語におけるような論理が社会の広い範囲に流通していると考えてよい。そういう日本語の論理は線的性格のものではなくて、点的性格の方がよく発達しているのは自然のことである。念には念を入れた、がっちりした構成の表現はむしろ重苦しいものと感じられる。上手な人のうつ囲碁の石のように一見は飛んでいるようであっても、その点と点を結び合わせる感覚が下敷きになっているときは決して非論理でも没論理でもなく、りっぱに「筋」をもっているのである。

日本語が論理的でないように考えられるのは、ヨーロッパ語の線的論理の尺度によって日本語をおしはかるからである。成熟した言語社会の点的論理を認めるならば日本語はそれなりの論理をもっていることがわかる。よく引き合いに出される禅にしても、点的論理の概念をとり入れることによって、その独自の論理性は充分合理的に説明できるはずである。また、俳句の表現もいわゆる論理、線状の論理からは理解しにくいものであるが、点的論理の視点からすればきわめて興味あるものになる。考えようによっては、点的論理がよく発達した言語社会だからこそ俳句のような短詩型文学が可能になったのだと言うこともできる。

点的論理の背後には陥没した線的論理がかくれて下敷きになっている。そして点を統合して線として感じとるところに表現理解の創造的性格がひそんでいる。(3)どんなにしても踏み外すことのない太い線をたどることがおよそ退屈であるのとは対照的である。

線の論理と点の論理についてもうすこし考えてみたい。線的論理は形式にあらわれているが、点的論理は線が風化して表面にあらわれているのは点のつらなりである。しかし、ひとつひとつの点は決してバラバラに散っているのではなくて、根と根でつながり結ばれているのである。点と点との間に互いに引き合う性質があるといってもよいし、受け手の側に、点と点を結合させて線をつくり上げる統合作用があるとしてもよい。

いずれにしても、点的論理が通用するところでは、離れ離れになったものを統合する作用のあることが前提である。かりにAという言葉があるとする。それを聞き、あるいは、読む人は、それにゆかりのあるさまざまなものを連想する。その連想のうちのひとつの方向線上に、つぎの言葉Bがつづいているとすると、一見無関係と思われるAとBとが引き合って脈絡をつくり上げる。

この連想はかならずしも意味の次元にかぎらない。音が似ていること

も連想の重要なきっかけになる。しゃれは音声的類似による連想の生ずる言葉のおもしろさであるが、線的論理を重視するところではしゃれがあまり尊重されないのは注目に値する。

　わが国のように[4]アイランド・フォーム（島国形式）の文化をもった社会では、ひとつひとつの言葉の連想領域が大きくなっている。同じように単語であっても熟した語には多くの語義や派生語が生じて辞書の記載スペースも大きいのに対して、新しく生れた語とか術語には熟した用法がなく、明確な語義をもつ代りに連想は乏しい。

　アイランド・フォームの文化内部における言語は熟した語と同じように*コノテイションがこまかく、軟かく、しかも、広範囲に発達している。[5]コンティネンタル・フォーム（大陸形式）の文化における言語は派生語やイディオムのすくない単語のように、語義の範囲が限定されていて、それが喚起する連想の領域もおのずからかぎられている。

　コンティネンタル・フォームの言語はたとえて言えば洋紙のようなものである。それに点をならべても、それは点のままで背後にかくれた風化した論理が下敷きになっていないかぎり、点と点とがつながることは考えられない。その代り、点と点を結んで明確な線を引くことができるし、その太さも必要に応じて変えることが可能である。

　これに対して、アイランド・フォームの文化における言語はいわば海*綿のようなものである。一箇所にインクをつけると、ひろがってにじむ。海綿の上に細い線をひくことは困難であるが、離して点をうつと、それがつながって面と面の接触がおこるようになる。したがって、点的論理においては線的論理への志向がはっきりしているわけではない。ときとしては、にじみにつられて、筋を忘れてとんでもない脱線をすることもある。縁語によって表現が展開している例などは、言葉の連想の自由なはたらきがいわゆる論理とはちがった方向へ伸びて行くことをよく物語っている。

　海綿状に発達した言語においては、直接的でつよい表現を与えることはむしろ効果的でない。ごく軽い、間接的な、あるいは象徴的な表現がよく利くのである。[6]したがって、そういう表現は多少ともあいまいになる傾向をもっている。ヨーロッパにおいてはあいまいさは明晰な論理の敵であると考えられてきたけれども、親密な伝達におけるあいまいさは表現の生命にプラスするものであることが、二十世紀になってからようやく認識されるようになった。*ウィリアム・エムプソンの『あいまい性の七典型』（一九三〇年）は西欧においてはじめてあいまいさの積極的意義を発見したことを告げる画期的な仕事であった。

　あいまいさは論理と対立するものではなくて、一種の論理であることを承認できるようになるには、社会が言語的にある成熟に達していなくてはならない。明晰な表現のあらわす論理が単線であるとするならば、あいまいな表現で伝える論理は複線で、また、いたるところで点線状になっていると考えてよい。[7]わが国ではきわめて古くから、表現の余韻、含蓄などが重視されており、あまりにも理屈のはっきりしたものはかえって軽んじられたという伝統が改めて思い合わせられる。話の筋にしても単一であると退屈だと感じられて、二重の筋、ダブル・プロット、三重の筋、トリプル・プロットが好まれるという事実も、いくらかこれと関係するかもしれない。

　外国語ならば、「のべる」とか「伝える」とか「表現する」といった語であらわすようなところに、日本語は、「におわす」「ほのめかす」「それとなくふれる」といった言葉を多く用いるのも、受け手につよい連想作用が具わっていることを見越して、あらかじめ表現を抑制して、表現が間接的にやわらかく相手に当るようにとの配慮に出るものであろう。

（外山滋比古「日本語の論理」による）

〔注〕インフォーマル――形式ばらない様子。
冗語性――無駄なこと。
等閑（とうかん）に付（ふ）された――いいかげんにほうっておかれた。
コノテイション――潜在的・多層的意味。
海綿――スポンジ。
ウイリアム・エムプソン――イギリスの詩人、批評家。

〔問1〕(1)第三者が聞けば何のことかまるでわからぬような省略の多い飛躍した言い方をしているが、それでけっこう話は通じ合っている。とあるが、なぜか。これを次の［　　］のように説明するとき［1］と［2］に当てはまる最も適切な表現を、本文中から［1］は**十六字**、［2］は**十四字**で探し、そのまま抜き出して書け。

> よく理解し合っている人たちの言語に内在する論理は［1］であるが、その論理の点同士は［2］から。

〔問2〕(2)点を線にするのは一種の言語的創造をともなうからであろう。とあるが、「一種の言語的創造」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　表現において、送り手が心理的親疎を測ることで、受け手の様子によって表現の方法を変えながら、意思の伝達を行うこと。

イ　表現において、送り手が内容全体を受け手に理解させるためにあえて用いた点的な工夫を、余韻や含蓄として味わうこと。

ウ　表現において、送り手がお互いにわかるはずであると省略した部分を、受け手が様々に連想しながら、理解し味わうこと。

エ　表現において、受け手が線的論理をつなぎながら、送り手の意図を考え推測してコミュニケーションをはかろうとすること。

〔問3〕(3)どんなにしても踏み外すことのない太い線をたどることがおよそ退屈であるのとは対照的である。とあるが、「踏み外すことのない太い線」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　受け手側に誤解を生じさせることがないように、無駄のない能率的な表現を用いて、一つ一つの言葉をゆるがせにしない構成をもつ論理のこと。

イ　受け手側に主張がはっきりと伝わるように、ダブル・プロット、トリプル・プロットを用いて、筋道の通った構成をもつ論理のこと。

ウ　受け手側に伝えたいことが理解してもらえるように、象徴的な表現を用いて、暗にほのめかす言葉で構成された論理のこと。

エ　受け手側に都合の良い解釈が可能となるように、便宜的な表現を極力用いて、成熟し洗練された言葉で構成された論理のこと。

〔問4〕次のa～fは本文中の筆者の述べている(4)アイランド・フォームと(5)コンティネンタル・フォームの文化における言語の特徴をそれぞれ説明している。適切なものはどれとどれか。正しい組み合わせを、あとの**ア**～**オ**の選択肢から一つ選べ。

a　複線だったり、点線状であったりして、解釈の余地があるが、必要の無いところが風化することで、より明晰な論理となっている。

b　重苦しくがっちりとした構成を持ち、その中に論理の形式がはっきりと見え、点をつなげて線として理解することができる。

c　間接的な表現が多く、抽象的な思想・観念などを具体的事物や形象に託して表現する傾向があり、物事が確実でなくはっきりしないこともある。

d　直接的な強い表現が用いられ、話の筋が単一で退屈に感じられることがあるが、受け手次第で、多面的な捉え方が可能となっている。

e　表現理解における創造的性格によって、点状に離散した論理が統合され、受け手の側に、誤解を生じさせないようになっている。

f　物事の筋道がとおっているが、語の意味の範囲が定められているため、他の関連したことを思い浮かべることが難しい。

ア　aとe
イ　bとc
ウ　cとf
エ　dとe
オ　aとf

〔問5〕(6)したがって、そういう表現は多少ともあいまいになる傾向をもっている。とあるが、「そういう表現」に**当てはまらないもの**はどれか、次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　他の人と会話中の人に話しかけるときに使われる「お話し中のところ失礼いたします。」という表現。

イ　買い物や映画などに一緒に行こうと誘われたときの回答に使われる「そのうちに。」という表現。

ウ　お茶やごはんのおかわりを相手から勧められたときの返事に使われる「結構です。」という表現。

エ　難しい提案を持ち掛けてきた相手に対する返答に使われる「前向きに検討します。」という表現。

〔問6〕本文の構成について説明したものとして、次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　前半の段落で平易な具体例を用いて、日本語の論理性についての問題点を明らかにし、本論では難解で抽象的な内容に説得力を持たせている。

イ　前半、後半ともに対比の構造を用いて、日本語の論理性についての見解を、生活、文化、言語そのものへと深める形で展開して述べている。

ウ　最初の段落でテーマ全体に触れて問題提起を行い、日本語の論理性について時代や地域、西洋の価値観などの項目ごとに結論をまとめている。

エ　まず効果的な暗喩などを用いて結論を述べた上で、本論では、日本語の論理性について、ヨーロッパ中心の従来の視点の変化を促している。

〔問7〕 (7)わが国ではきわめて古くから、表現の余韻、含蓄などが重視されており、あまりにも理屈のはっきりしたものはかえって軽んじられたという伝統が改めて思い合わせられる。とあるが、このことについて、あなたはどのように考えるか。日常の生活においてあなたが他者に考えを伝えるときには、どのようなことに気をつけているかを踏まえて、あなたの考えを**二〇〇字以内**で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

---

5 次の文章は古代和歌の一つの形式である旋頭歌（せどうか）について述べた文章である。読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔**注**〕がある。）

夏影の　房（つまや）の下に　衣裁（きぬた）つ吾妹（わぎも）　うら設（ま）けて　吾（わ）がため裁（た）たば
やや大（おほ）に裁て

万葉集巻七に、「右の二十三首は、柿本朝臣（あそみ）人麿の歌集に出（い）づ」として収録されている旋頭歌のうちの一首である。

旋頭歌の運命は、地球上のはげしい生存競争に敗れて姿を消していった古代の生物たちの運命をふと連想させる。もちろん、可憐（かれん）な旋頭歌が、あれら恐竜の種族と共通する何物を持っていたわけでもないが、今、歴史のはるかな遠景に、子供たちの愛惜の眼差（まなざ）しを浴びて空想の中に生きつづける古代のけものたちは、その巨（おお）きくありすぎた*体軀（たいく）のゆえに、適者生存のきびしい法則をのがれ得なかった点で、(1)短歌という「適者」に駆逐された旋頭歌（また長歌）の運命と一脈相通じるものをもっているように感じられるのである。

旋頭歌の形式は、いうまでもなく、五七七、五七七と、*片歌の形式を繰返（くりかえ）すことによって成るものである。五七五七七の短歌形式とくらべると、上句最後の七音だけ短歌形式よりも多いわけだが、口誦（くちずさ）んでみれば明らかな通り、これは単に七音多いという数量的な違いだけのものではない。短歌の場合、五七、五七、七という区切り方に始まって、五七五、七七へ、さらに五、七五、七七へと、同じ三十一音の形式の中でも、歴史的に大観したとき、調子の上でいくつかの大きな変化の波があった。それは、短歌形式と一口にいうものの、実はその形式自体に豊かな弾力性があり、時代感情の変化に応じて調子も変化してゆくという柔軟な適応力がそなわっていたことを意味している。

ところが旋頭歌にあっては、五七七、五七七という調子のとり方以外の読み方はできないのである。このことは、短歌との、ほとんど本質的な相違だといってよい。読む人は、五七七で一旦息を切り、つづけて次の五七七に移る。これ以外には読み方はない。このことは、当然、旋頭歌という形式の制約とみなされねばなるまい。調子がやや間延びして単調になるのは、この形式上の制約の必然的な結果であった。しかも、五七調から七五調へと大きく変化してゆくことによって短歌形式が成就した、重々しさから軽やかさへの質的転換のようなものがないままに、五七七の、やや重たく、悠長に響く調べを守り通すほかなかったことは、旋頭歌がたちまち時代遅れの形式になってゆく運命を暗示していたといってよい。

万葉集にさえ、わずか六十首あまりが録されているにすぎないのが、旋頭歌の実態である。しかもそのうち、人麿歌集よりとされるものが、巻七の二十三首、巻十一の十二首と半数以上を占め、他の歌人たちの作は、たとえば山上憶良のあのよく知られた歌、

はぎの花　尾花　くず花　なでしこの花　をみなえし
また藤袴　朝顔の花

のように、(2)もはや余技的なものとして試みられているにすぎない。人麿は、ここでもまた輝かしい位置にいるということがいえるのだが、アいずれにしても、もし人麿という天才なかりせば、旋頭歌という形式は、*仏足石歌体（五七五七七、七）のような、短歌形式への付属歌体と同列に置かれて、もっと早くに忘れ去られていたかもしれないと思わせられる。

しかし、今、そういう和歌史の展開に関するさまざまな記憶を離れて、旋頭歌、(3)なかんずく人麿作の旋頭歌を口誦むとき、そこにある種の*掬すべき情趣があることを強調せずにはいられない。短歌が、三十一音の中にひとつの貫流する調べをたたえ、一首全体の統一性と純一な感動の高まりにおいて、抒情詩表現の一極限形式を確立したのに対し、旋頭歌は上句五七七と下句五七七との間の句切れの単調さが、一首の集中性・凝縮性を何ほどかの程度において薄めていることは、イたしかに否定できない。しかし、その反面、旋頭歌のこういう、やや間延びしたリズムが、一種の古拙な味わいを生み、個人の主観の燃焼とはおのずと異なる、*謡いもの風な、あるいは*譚詩風な、つまり不特定多数の人間の共通感情の表現であるような性質をそこに生みだしていることを、見逃すわけにはいかないのである。

冒頭に引いた「夏影の」の旋頭歌を見よう。濃い緑葉が茂って作る大きな影の下に、夫婦の嬬屋（寝室）がある。夏の烈しい日射しをさえぎるその涼しい影の中で、妻は衣を裁つのに余念がない。その妻の姿が、客観的に、やや距離を置いて眺められているのが、上句である。ついで、句切れの小休止をおいて、ふたたび歌はゆったりとした調子で、歌い手自身の気持を歌いだす。「うら設けて」は、原文*「裏儲」とあり、「着物の裏を用意して」とする説、また「心設けをして」とする説があるようだが、前者の解はやや理につきすぎてわずらわしい感じがあり、私は後者の解をとりたい。つまり、妻よ、心を傾けて私のために衣を裁つならば、という意味にとりたい。さてこの旋頭歌の、*画竜の睛というべき魅力的な箇所は、いうまでもなく「やや大に裁て」という結句にある。この結句の大らかな魅力についてウ殊更に説く必要はあるまい。ところで、この結句で、「やや大に」といっているのはどういう意味だろう、と私はふとエいぶかしく思う。二人はまだ若い夫婦で、夫は自分がこれからも体がさらに伸びることを知っていてこう呼びかけたものだろうか。それとも、夏服だから、ゆったりと、涼しげに作って欲しいといいたかったのだろうか。あれこれ空想させられる。けれども、結局それらの解釈のすべてを越えて、「やや大に裁て」という、暢びやかな、張りのある、

しかも細やかな陰影を帯びた七音の語句が、私たちの心に音楽的な情感のたゆたいをさそってやまないのだ。

この古拙な感じ、悠揚せまらぬ感じ、細やかな情感が小うるさい描写などなしに湧き流れている感じ、そこに私は、人麿の旋頭歌一般に通じる特徴を見うるように思うのである。

（大岡信「私の古典詩選」による）

〔注〕体軀（たいく）――からだ。身体。

片歌――和歌の形式の一つ。

仏足石歌――和歌の形式の一つ。

掬（きく）す――すくう。

謡（うた）いもの――詩歌や文章に旋律をつけて歌うもの。

譚詩（たんし）――物語詩。

原文「裏儲（うらまけて）」とあり――原文である『万葉集』にはこの文字を用いて表記されている。

画竜（がりょう）の睛（せい）――大切なところ。

〔問1〕(1)短歌という「適者」に駆逐された旋頭歌（また長歌）の運命と一脈相通じるものをもっているように感じられるのである。とあるが、「短歌という『適者』に駆逐された」とは、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　旋頭歌は、重厚な調子の表現方法で一時代を築いたが、軽やかさを重要視する時代感情の変化に対応できず、過去の遺物となったということ。

イ　軽快で、可変的な調子が特徴的な短歌の登場にともなって、古くから広く人々になじみのあった旋頭歌の形式が、壊されてしまったということ。

ウ　短歌という新時代の芸術が流行することで、古い歴史をもち、伝統的な調子で詠（よ）まれる旋頭歌の技術の継承が、途絶えてしまったということ。

エ　柔軟で、時代の変化にしなやかに対応した短歌の特性が、歌を詠む人々に好まれ、融通（ゆうずう）のきかない旋頭歌は用いられなくなっていったということ。

〔問2〕(2)もはや余技的なものとして試みられているにすぎない。とあるが、具体的にはどういうことか、次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 専門的な知識や技術を用いて作り上げられる歌とは別に、なじみのある言葉を用いて、大衆にも理解できる歌として作られてしまっているということ。

イ 本来作者の感情や感動を情緒的に述べるために用いられるべき歌であるが、感情の表現ではなく、単なる言葉遊びに終始してしまっているということ。

ウ 情景や心情などを描写するためのものであるはずの歌が、同じ調子の繰り返しの巧みな様子を、表現するためのものとなってしまっているということ。

エ 歌人が自分の持てる才能を結集させて作りこんだ歌というよりも、元々の歌作りの視点からは離れた、低次元のものとなってしまっているということ。

〔問3〕(3)なかんずくとあるが、この「なかんずく」と同じ意味となる語句を、本文中の═══線部をつけた次の**ア**から**エ**のうちから選べ。

ア いずれにしても

イ たしかに

ウ 殊更に

エ いぶかしく

〔問4〕筆者は、柿本人麿の「夏影の」の歌について、どのような点にひきつけられていると述べているか、次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 上句は妻に対する客観的な視点であるのに対して、下句は歌い手自身の心情の描写という対比が、若い夫婦の初々(ういうい)しい様子を想像させる点。

イ 「やや大に」という表現を用いることで、きっちりと計算された情景ではなく、読み手の多様な解釈や余白を生み出す効果をもたらしている点。

ウ 季節や場所などの状況描写という外側に向いていた視点が、少しずつ内側への視点に変化し、読み手に感覚的に訴える魅力を持っている点。

エ 全体的にゆったりとした雰囲気を読み手に感じ取らせるために、「大に」という表現を核にして、全体の構成が巧みに洗練されている点。

〔問5〕本文の内容に合致するものとして、次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 短歌との比較という歴史的な背景や専門的な用語をおりまぜながら、歌人の人麿がいかに魅力的であるかを伝えるための持論を展開している。

イ 人麿の歌を例にして旋頭歌のたどってきた悲劇的な運命や短歌との関係を前半で述べ、後半では旋頭歌自体の魅力について解説している。

ウ 筆者の旋頭歌に対する思いを最後の段落にまとめとして提示するために、「夏影の」の歌の内容を冒頭から取り上げ詳しく説明している。

エ 万葉集に収録されている旋頭歌を引用し、短歌との形式の違いや旋頭歌固有のリズム感のもたらす表現の特徴について独自の見解を述べている。

5
国

国

语